キャラクター名
朝下 仁(あさした じん)

プレイヤー名

シンドローム	エグザイル ブラム=ストーカー	ワークス	UGNエージェントB	カヴァー	研究員
オプショナル	ソラリス	年齢	29	性別	男
覚醒	死	衝動	嫌悪	初期侵食率	33 %
出自	疎まれた子	経験	技術畑	邂逅	主人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	0	0			3
感覚	3	1	1			5
精神	1	0	0			1
社会	1	0	0			1

HP	27
行動値	11
(非装備時)	11
戦闘移動	16
全力移動	32

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	7		ＲＣ	1		交渉		
回避			知覚	1		意志			調達	2	
運転：			芸術：			知識：ﾚﾈｹﾞｲﾄﾞ	2		情報：UGN	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
骨の銃	射撃	5r+6	-	LV+5		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ:要人への貸し	
コネ:UGN幹部	
情報収集チーム	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
屍人	P	N		
オーヴァード	P 同情	N 嫌悪		
朝下瑞香	P 純愛	N 悔悟		
クールヘッド	P 有為	N 脅威		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6	残り財産P： 2

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ:ブラム=ストーカー	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果： C値-LV(下限値7)								
活性の霧	4	3	セットアップ	至近	単体	自動	-	
効果： ラウンド間攻撃力+[LV×3]/ドッジD-2個								
腐食の指先	1	2	メジャー	武器	単体	対決	-	
効果： 命中時シーン間装甲値-[LV×5]								
滅びの一矢	4	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果： ダイス+[LV+1]個/HP2点消費								
血の宴	2	3	メジャー	-	範囲(選択)	対決	-	
効果： 対象を範囲(選択)に/シナリオLV回								
骨の銃	4	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果： 武器作成/命中-1/攻撃力+[LV+5]/射程20m								
死招きの爪	2	3	マイナー	至近	自身	自動	リミット	
効果： ↑の攻撃力+[LV×5]/他武器装備不可								
殺戮領域	1	3	メジャー	-	-	対決	リミット	
効果： 組み合わせた攻撃の攻撃力+10/シナリオLV回								
擬態の仮面	★	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果： みずからの顔や姿をその場に適したものに変化させる								
虹の香り	★	-	メジャー	視界	シーン	自動	-	
効果： 特定の匂いを発生させる化学物質を作り出す								
効果：								
効果：								
効果：								

朝下 仁(あさした じん)
日本支部の研究員。ミステリアスな雰囲気の男。いつも疲れたように笑っている。普段はあまり外には出ず研究室に引き篭もっている。元々あまり頭の良い方でもないしどちらかといえば戦闘向きの能力なのだが本人が強く研究部門の配属を希望し並々ならぬ努力をしていたことが認められ、2年ほど前から研究部門に配属された。主にレネゲイドを鎮静化するための研究をしているがあまり成果は出せていない。
いつも花のような香りを漂わせている。…が、鼻の利くオーヴァードの話によれば、彼に近づいた際どこか腐ったような、いわば死臭がしたという。

RHOに関わる設定
「おれは、こんな姿になってまで、生きる意味を失ってまで、生き存えたくはなかったよ」
――彼が「オーヴァードを人間に戻す薬」を欲する理由を一言で表すなら、「化け物ではなく人間として死にたい」からである。

〇過去
子供の頃、両親が離婚し、母親に引き取られたが、母親は再婚して子供を授かると、仁に対してきつくあたるようになった。再婚相手も同様に連れ子を疎ましく思っており家に居場所などなかった。それどころか、しまいには憂さ晴らしに暴言を吐かれ、暴力を振るわれる羽目になった。
「邪魔なんだよ」「どうして生きているんだ」「あんたなんか産むんじゃなかった」
否定の言葉の数々に、少年は自分は生きているべきではないのだと思うようになった。何もかもがどうでもよくなって、学校の屋上から飛び降りようとした高校時代のある日、少年は一人の少女と出会った。
今から飛び降りようとしている少年に「なにしてるの？」とごく普通に話しかけたその少女からは、ふわりと花のような香りがした。
なんというか少女はいわゆる天然と言われる部類の人種で、少年がいまここで死のうと思っていること、生きる意味がないのだと思っていることを話すと、ようやくことの重大さを理解したように慌てはじめて、
「じゃあこうしよう、あなた、生きる意味がなくて困ってるんでしょ？だったら、私があなたの生きる意味になってあげる！だから、だからもう少しだけ、生きてみない…？」
などと突拍子もないことを言い始めたのだった。